

大学図書館の資料保存の実態調査

大平 奈美

本研究は現在の日本の大学図書館の資料保存の体制と資料劣化に関わる外的要因、内的要因そして人的要因の 3 点について、要因別にみた資料保存の実態を明らかにすることを目的とする。さらに図書館での資料保存を考える上で最も重要とされている資料保存の方針を定めている大学は、何が重要視されているのか、資料保存という概念に対して職員がどのように考えているのか、といった資料保存の方針の作成や、実際の業務を行うでの根底に含まれるだろう大学図書館職員の資料保存への意識を明らかにすることを目的とする。

調査方法としては、第一に Web アンケートを行った。2003 年から現在まで存続している 434 館の大学図書館に対しメールを送付、Web 上で 369 の回答を得た。第二調査においては、第一調査で明らかになった「資料保存のマニュアル・規則のある大学図書館」70 館のうち、メールアドレスがわかる大学図書館 55 館に、同様に質問紙の URL を掲載したメールを送付した回答を得た。

調査の結果、現時点での大学図書館での資料保存は、大規模な大学では資料保存に関する専門の部門はなくても、職員が兼務して資料保存にあたっていることが明らかになった。また、大学の規模が大きいほどマニュアル・規則を有している比率も高くなる。また、マニュアル・規則を有している館ほど、専門の部門の設置や特に貴重書に関して環境面の管理が行き届いているという傾向が見られた。また、貴重書と一般書では保存方法に差異があった。

貴重書よりも一般書の方が、利用者に利用されやすく、貴重書が「資料を守り、長く残していくための保存」と考えられているのに対し「利用者がいかに使いやすくするために焦点を当てた資料保存」ではないかといえる。

また、対策を充分に行っている大学図書館には資料保存方針があることが明らかになった。今後、質の高い資料保存を行おうとする場合、まずは方針を立てることが重要であると考えられる。

(指導教員 逸村裕)